

おばあちゃんの決断

作：岡崎ルツ子

演出：小川政弘

登場人物

橘すみれ 76 歳。

橘善一郎 54 歳。すみれの長男。

橘和子 51 歳。その妻。

栗田龍二 52 歳。次男。産婦人科医師。

橘栄三郎 44 歳。三男。商社勤務。

大西昭子 50 歳。長女。専業主婦。

大西忠志 54 歳。昭子の夫。メーカー勤務。

大西直樹 23 歳。孫。大学 4 年生。

大西久美 21 歳。孫。短大生。クリスチャン

山本望 24 歳。<いこいのみぎわ>勤務

< 前編 >

(大西家の庭。10月の晴れた朝。すみれが薙刀のけいこをしている。)

すみれ 「たーっ、とーっ。」

直樹 「ちょっとー、おばあちゃん、何事？日曜の朝っばらから…。」

すみれ 「見りゃわかるだろ、なぎなたのお稽古。たーっ。」

直樹 「勘弁してよ。(大あくび)狭い庭なんだからさ、ほら柿の木に気をつけてよ。」

すみれ 「早起きは三文の得。いい若いものがいつまでも寝てるんじゃないよ。それっ、たーっ。」(ボキッ、木の枝が折れる音。)

直樹 「おばあちゃんっ。」

N 僕のおばあちゃんの話をして。橘すみれ。母方の祖母。今日 76 歳になる。東京下町育ち。76 歳ですみれというのも笑えるが、ひいおじいさんが白樺派に傾倒していて、ロマンチックな名前をつけたかったらしい。女学校出で趣味は英語、なぎなた、ゲートボール。きれいなものは裁縫と料理。若い頃は向島小町と呼ばれていたと自慢しているが、ほんとのところはどうか。白髪頭を短く切りそろえて、いつもきりりと和服である。孫の僕から見てもまあいい線はいつていると思うけど、性格がちょー個性的なんだ。

直樹 「ちょっとー、困るよ。広くないんだから、うちは。」

すみれ 「あれっぼちの庭にごてごて植えちゃって、余白の美ってもんを知らないのかねえ、ここんちは。」

直樹 「何だよ、よはくのびって。」

すみれ 「これだ、今時の大学ではいったい何教えてるんだか。お前、来年は大丈夫なんだろうね。」

直樹 「えっ、なんだよ。」

すみれ 「あたしが知らないとも思ってるのかい。2年も留年してさ。ほんとにしょうがないねえ、この万年モラトリアムが。」

直樹 「きつーっ。」

N 痛いところを突かれた。前期試験の結果も悲惨だったせいで、早くも来年の進級が危なくなっている状況なのだ。

直樹 「あのねえ、俺だって好きで留年してるんじゃないの。やりたいことが見つからないまま、先に進みたくないだけ。」

すみれ 「ばかをお言いでないよ。何だってね、一生懸命真面目に生きていく、それが一番大切なんだよ。」

直樹 「真面目にねえ。」

すみれ 「あたしはね、おじいさんが死んでから、そりゃ苦勞のし続けだったけど、おかげでこの年まで元気で、雨露しのげる家があって、子供たちはそれぞれりっぱにやってるし。」

久美 「でもね、おばあちゃん、それっていつまでも続くもんじゃないでしょ？」

N いつのまにか妹の久美が立っていた。久美は、ぱっと見、今時の女子大生だが、キリスト教の教会に通っていて、僕とは違い人生についていろいろ考えているようだ。

久美 「聖書にあるの。『日の下で行われるすべてのことはみんなむなしい』って。」

直樹 「むなしい？」

久美 「神様から離れて本当の生きる喜びはないの。神様を恐れることが、人にとって本当に大事なことなの。つまりね、(まだ続けようとして)」

直樹 「あ、おい、教会遅れるぞ。」

久美 「やだ、こんな時間？ 続きは後でね。」

直樹 「夕飯、親戚集まるんだから遅れんなよー。」

久美 「(遠ざかりながら)わかってるー、行ってきまーす。」

すみれ 「(直樹に)あたしの誕生日だからって、シドニーの栄三郎まで呼ぶなんてね。御苦

「あんなに。」

直樹 「うれしくせに。」

すみれ 「ほら、ぼやぼやしないで掃除くらい手伝いなさい。」

直樹 「はいはい。」

すみれ 「返事はひとつでよろし。」

直樹 「ふあーい。」

N 今日、すみれおばあちゃんの誕生日に、子供達みんながそろってお祝いするのだ。毎年恒例の行事だが、今年はおばあちゃんの今後のことで、親族会議も開かれることになっている。これはもちろんおばあちゃんには内緒。集まったのは、長男の善一郎伯父さんと和子伯母さん夫婦、次男の龍二伯父さん、長女で僕の母の昭子、末っ子の栄三郎伯父さん。それに、親父の忠志と妹の久美に僕、総勢8人。これだけ揃うと、我が家の居間はぎゅうぎゅう詰めである。

—居間で会食。楽しくやっている。—

栄三郎 「うまいなあ、姉さんのちらし寿司は。」

昭子 「ありがと。」

すみれ 「何かあれば散らし寿司だもの。上手くなりますよ。」

昭子 「こっちの海苔巻は久美作。食べてやっ。」

和子 「久美ちゃん作ったの？おいしいわあ。いいわね女の子は。」

昭子 「やっとな最近ね、料理のまねごと。いつも忙しいんですもの。」

龍二 「何、久美ちゃん、まだ教会行ってんの？」

久美 「ええ。」

すみれ 「何思ったんだか、洗礼まで受けちゃったんだよ。」

龍二 「そりゃえらいよ、本物だ。」

善一郎 「(だいぶ出来上がって)いいんじゃないの？うちの一族からキリシタンが出て、ねえ、母さん。」

和子 「あなた、ちょっとお控えになったら？」

すみれ 「いいんだよ、飲ましておやりよ。こんな時なんだから。」

善一郎 「そうそう、こんな時。父さんの会社つぶしちゃって。せっかくの母さんの誕生日に悪いと思ってるよ。俺だって。」

和子 「あなた。その話は…。」

すみれ 「お前のせいじゃないよ。」

龍二 「そうだよ、日本中が不況なんだから。兄さんよくやってくれたよ。」

昭子 「善一郎兄さん、大根の煮付けあがって。」

善一郎 「龍二、お前だったらよかった。お前、成績良かったんだから。」

龍二 「無茶言わないでよ。」
善一郎 「栄三郎、お前でも俺よりか上手くやれた。要領いいいな。」
栄三郎 「俺は、だめ。こつこつやるのは性に合わないもの。兄さんが一番。」
昭子 「そうそ、兄さんが一番。真面目だもの。さあ、食べて、残されたら困っちゃう。」
すみれ 「直樹、あんた歌いなさい。」
直樹 「ええっ、何で急に俺にふるの？」
久美 「(小声で)お兄ちゃん、歌って。じゃないと、ちょっとやばいよ、この雰囲気。」
忠志 「直樹、歌え。ほら、おばあちゃんの好きなグレーだかグリーンだかあるだろ。」
すみれ 「一緒に歌おう。チャゲアスしよう。あたしチャゲ歌うからあんた飛鳥ね。」
直樹 「ええっ、ちょっと勘弁してよー。」
皆 「いいぞー。」 「やれやれ。」 拍手と掛け声。
- 直樹やけ気味ですみれと歌う。みんな囃す -

栄三郎 「おばあちゃん、寝た？」
昭子 「ええ、部屋が静かになったわ。」
和子 「こっちも。(善一郎をさし)」
龍二 「悪いことしたな。兄さんに。栄三郎もシドニーから帰ってくるので、おふくろのこと、相談するいい機会だと思ったんだけど…。」
和子 「御迷惑かけちゃって…。家売ることにならなければ、ずっと居てもらって良かったんですけど…。」
龍二 「兄さんの所が難しいとなると…。」
昭子 「龍二兄さんの所は？家広いじゃない。」
龍二 「おい、俺は婿養子だよ。女房の両親もいずれ同居するし、広いたって半分以上は病院だ。見かけほどじゃないよ。それに…。」
昭子 「何よ。」
龍二 「おふくろさん、気が強いだらう？悪気はなくてもうちの奴とぶつかるよ。」
昭子 「娘の私でも、ちょっと持て余すものね。」
栄三郎 「シドニーに来てもらってもいいけど。」
皆 「ええっ？」 「そんな。」
栄三郎 「結構いるよ。年取った日本人が。定年むかえた老夫婦とかね。」
直樹 「すげえな。『おばあちゃん海を渡る』かあ。」
栄三郎 「プールあって、庭にレモンやオレンジ植わってて。肉も食べ放題。」
龍二 「うーん、それもありか？」
昭子 「あ、だめ。だめよ。大根ないでしょ。」
栄三郎 「大根？ないな、さすがに。」
昭子 「大根なきやだめよ。ちょっと旅行するのと違うんだから。住むんだから。いくら英

語がべらべらだって。」

龍二 「まあな、大根に象徴される日本の風土の中に 75 年も住んできたひとだからなあ
…」

忠志 「やっぱり、うちしかないのかなあ。」

昭子 「ちょっとあなた。狭すぎるわよ。」

善一郎 「(むっくり起きて)頼むよ、昭子。」

昭子 「やだ、兄さん起きてたの？」

善一郎 「(改まって)忠志さん、昭子、悪いが、おばあちゃんを頼みます。」

昭子 「…でもね、直樹や久美にまだお金かかるし、家のローンも残ってるしね。もっとも、
兄さんたちに助けてもらえれば、そりゃ考えないこともないけど。」

龍二 「そりゃもちろん。出すよ。決まってるだろ。」

栄三郎 「俺だって送るよ。毎月。」

善一郎 「頼むよ、なあ。」

昭子 「(仕方なく)いいわ、おばあちゃんにはこの家で暮らしてもらいます。」

栄三郎 「よし、これで一安心。姉さん、おかわり。」

- 一同ほっとし、再び飲み食べ始める -

N こうして、主賓は寝かせたまま宴は再び盛り上がり、夜遅く酔いを冷ました伯父さん
たちが帰ったの洗い物は、僕と久美が引き受けた。

- 台所。直樹と久美、茶碗洗ってる。 -

直樹 「おばあちゃん、ずっとこのうち住むらしいよ。」

久美 「(元気なく)うん、聞いた。」

直樹 「なんだ、どうしたの？」

久美 「なんか可愛そうになっちゃって。聖書にさ、あなたの父と母を敬えてあるけど、
難しいよね。やっぱり。」

直樹 「敬ってるんじゃない、あれはあれで。でもいろいろ事情があるんだよ。おばあちゃん
だって、もうちょっと可愛く枯れてたらいいよ、朝から大声出して、料理はきらい
なんてやられちゃさ、困っちゃうよな。」

久美 「だよね。」

直樹 「うちで良かったんだよ。うちで。」

N ところが、次の日の朝。僕は母のただならぬ声に飛び起きた。

昭子 「お父さん、直樹来て、来てちょうだいっ。」

直樹 「何、どしたの？」

昭子 「いないのよ。おばあちゃんが。」
忠志 「朝の散歩だろ。」
昭子 「だって、この置手紙が。」
直樹 「どれ。(ひったくって)『思うところあって、ここを出ます。しばらく捜さないで下さい。また連絡します。すみれ。』」
久美 「わけわかんない。」
忠志 「と、とにかく兄さんたちに連絡して、心あたりを捜そう。」
昭子 「警察には？警察に電話して(泣きながら)」
直樹 「後だよ、そんなこと。」
昭子 「多摩川に沈んじゃってるかも。」
直樹 「なんで、多摩川。不吉なこと言うなよ。」
久美 「聞いてたのよ、昨日の夜の皆の会話。」
昭子 「心中だったらどうしよう。」
直樹 「心中って一人じゃできないんだよ、母さん。」
忠志 「うるさい、聞えないだろうが。もしもし、あ。龍二兄さん、あのね、じつはね、おばあちゃんが失踪しちゃったんですよ。『そそう』じゃない、失踪。家出。いや今朝起きてみたらいなくてさ…」(以下小さく)

N 祖母、橘すみれ76歳。誕生日の翌日にやってくれました。突然の家出。いったいどこに行ったんだよ、おばあちゃん。

< 後編 >

(回想)

昭子 「お父さん、直樹、久美、来て、来てちょうだい。おばあちゃんがどこにもいないのよ。」
すみれ 「(置手紙)思うところあって、ここを出ます。しばらく捜さないで下さい。また連絡します。すみれ。」

N 僕のおばあちゃんの話をして。僕の母方の祖母、橘すみれ 76 歳が家出したのは、誕生日の次の日のことだった。長男の善一郎伯父さんが後を継いだ会社が倒産してしまい、おばあちゃんは、娘である僕の母昭子の家に同居することになった、その矢先にこの事件。すぐに兄弟が我が家に集められた。

龍二 「いったい何が不満なんだよ、おふくろは。」
栄三郎 「少し脅かしてやろうって、そんなとこでしょ。」

昭子 「でもね、おばあちゃんが行くところってそうはないのよ。女学校の同級生で親友だったって方も去年亡くなってるしね。やっぱり警察に届けた方が。」

忠志 「いや、警察はまだ早いよ。後で連絡しますって書いてあるんだから、もう少し待とう。」

善一郎 「俺が悪いんだよ。会社つぶしてしまったばかりに皆に迷惑かけて。」

龍二 「何言ってるんだよ、それとこれとは話が別だよ、兄さん。」

直樹 「久美、お前んとこのキリスト教の神様に、おばあちゃんの無事を祈ってくれよ。」

久美 「とっくに祈ってるよ、お兄ちゃん。」

- 直樹の携帯が鳴る。 -

直樹 「あっ、俺のケータイ。…もしもし」

すみれ 「もしもし、直樹？」

直樹 「あ、え？おばあちゃん？」

すみれ 「久しぶりだね。元気かい。」

直樹 「何のんきなこと言ってるんだよ。こっちは大騒ぎで心配してたんだから。伯父さんたち、みんな来てるんだよ。」

すみれ 「そう、みんな集まっているのかい(満足げ)。」

直樹 「どこ、今どこにいるの？」

すみれ 「それはまだ言えないね。でも心配いらないよ、あたしは元気だったって伝えておくれ。後であんたと、久美にだけ連絡する。」

直樹 「何、どういうこと？」

すみれ 「あんたを信じて、明日また夜8時に連絡するけど、他に言うんじゃないよ。」

昭子 「(ひったくって)ちょっと、おばあちゃん、どこから電話してるの、おばあちゃん。」

- ツー-----

昭子 「切れてる…。」

N すみれおばあちゃんの無事がわかって僕らはひとまず安心した。伯父さんたちは帰っていったが、母の機嫌はめっちゃ悪かった。また連絡すると言われたことは、何だか母には言える雰囲気ではなかった。

- 居間。昭子は夕食後の片付け。忠志、新聞読んでいる。 -

忠志 「おばあちゃんのことだもの、案外旅行してたりしてな。後でおみやげ持って帰ってきたりするんじゃないのか？」

昭子 「ほんと、人騒がせなんだから。」

忠志 「まあ、あんまり事を荒立てないほうがいい。帰ってきてても、がみがみ言うんじゃないぞ。」

昭子 「わかってますよ。」

- 直樹の携帯鳴る。 -

直樹 「はい。」

すみれ 「直樹、あたし。」

直樹 「おば、あ、げ、元気？」

昭子 「直樹、誰？」

直樹 「(昭子に)あ、友達。(声ひそめて)ちょっとどういうこと？」

すみれ 「今度の土曜、ちよいと埼玉まで来てくれないかい。」

直樹 「埼玉っ？」

すみれ 「箆笥の中の物持って来て欲しいのよ。いいかい、昭子たちに言うんじゃないよ。」

直樹 「ちょっと、困るよ。」

すみれ 「あんたと、久美だけだよ、こっちに来ていいのは。」

直樹 「そんなわけには…」

すみれ 「行き先は後で知らせるから、いいね。」

N それっきり電話は切れてしまった。

N 次の土曜日、僕と妹の久美はおばあちゃんの荷物に乗って車で埼玉に向かった。

久美 「おばあちゃん、埼玉に知り合いいたっけ？」

直樹 「知らねえよ。あーあ、なんで俺たちが家出ばあさんのパシリしなきゃなんないの。」

- 電話呼び出し音 -

直樹 「久美、頼む。」

久美 「うん。…もしもし。」

すみれ 「ああ、久美かい。今、どこ走ってるの？」

久美 「ええと、サイキョーってスーパー過ぎたところ。」

すみれ 「ああ、じゃ、じきだね。そこから少し行くと右に曲がる細い道があって、ずーっと坂になってるから。その坂登っといで。」

N おばあちゃんの言った通りならかな坂を登って行くと、道なりに桜の木が何本も植わっていた。その桜の終着点に2階建ての建物があった。

久美 「(表札を読む) <いこいのみぎわ> ?」

直樹 「老人ホームだっ。」

すみれ 「御名答っ。」

直樹、久美「おばあちゃん！！」

N 見るとおばあちゃんが真新しい着物を着て立っていた。思いのほか元気そうだ。

直樹 「おばあちゃん、何でこんなとこ。」

すみれ 「話はあとあと。荷物部屋に入れとくれ。」

N おばあちゃんの部屋は、小ざっぱりした4畳半だった。変な茶色のカーテンがかかっている。

すみれ 「趣味悪いだろ。前の住人が残していったんだよ。今度カーテン頼まなきゃね。」

直樹 「そんなことより何でだよ。母さんたちに相談も無しで。」

すみれ 「相談したらかえって迷惑かけるだろ。どこだってあたしを置いておけやしないんだから。」

久美 「そんなことない、せっかくうちに居てもらうことになったのに。」

すみれ 「あたしがここに来たかったんだからいいだろ。」

直樹 「(キレて)何だよ、その言い方。だいたいわがままだよ。わがままだよ、おばあちゃんは。」

N それを聞くと、おばあちゃんはきっと僕らに向き直った。

すみれ 「あんたたちのお母さんが、兄さんたちにお金を要求してるのを聞いてね、ああ、あたしはここに居られない、そう思ったよ。」

久美 「やっぱり聞いてたの…。」

すみれ 「あたしだって文無しじゃない、ちゃんと年金もらって暮らして行けるんだから、お金で迷惑かけるつもりなんかない。」

直樹 「でも…。」

すみれ 「『ああ、あたしは取り引きされてるんだ』と思ったね。戦争からこのかた必死で生きてきて、子供達4人皆立派に育て上げたあげくがこれだ。…久美の言った通りだよ。あたしの人生、何か足りなかった。」

久美 「でも、どうしてここに…。」

すみれ 「その足りないものを見つけるには、何か目に見えない大きな方に教えてもらわなきゃいけないような気がしてさ。そしたらこないだ久美が言った聖書の言葉を思い出したのよ。『日の下で行われるすべてのことはむなしい』。今のあたしにぴった

りだよ。で、こんなすごいことを言える神様なら大丈夫、あんたが信じてるこの神様なら信用できると思ってね。電話帳で基督教の老人ホームを調べてここに来たのさ。」

(戸をたたく音。職員の山本望)

山本 「橘さーん。あら、お孫さんですか？」

すみれ 「川崎の孫。忙しいのに来てくれたの。」

山本 「よかったですねえ。(直樹たちに)橘さんみたいにお元気な方が入居してくれてよかったですよ。(すみれに)あ、それから今日お当番よろしく願います。」

すみれ 「忘れちゃいないわよ。」

山本 「ふふ、そうですよね。それじゃ。」(戸のしまる音)

直樹 「何、お当番って？」

すみれ 「聖書研究会の司会。聖書のことばも覚えるんだよ。ほら、暗唱聖句っての。<神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。伝道者の書12章13節>」

久美 「すごい、おばあちゃん。」

すみれ 「これくらいはおちゃのこさ。あれ、もうこんな時間。さ、早くお帰り。」

久美 「まだいいでしょ。」

すみれ 「だめだめ、聖書研究会には早めに行って席とらないと。正助さんのそばに座れない。」

直樹 「誰、それ？」

すみれ 「ちよいと姿のいい人。ホームじゃ一番人気なんだよ。」

直樹、久美「(あきれて)はあー？」

(車の発進音。)

久美 「お兄ちゃん、おばあちゃん元気でよかったね。」

直樹 「うん。」

久美 「帰ったらお母さんたちに何て言う？」

直樹 「じいさんのおっかけやってたって。このまま老人ホームにいさせてやろうっていうよ。」

久美 「ふふ、そだね。」

N 「なんだか立ち去りがたくて振り向いたら、老人ホームの窓から身を乗り出すようにして、おばあちゃんが手をふっているのが見えた。」

久美 「元気でねえー。また来るからねー。」

すみれ 「待ってるよー。」

N すっかり紅く染まった桜並木の中で、懸命に手をふるおばあちゃんがなんだか少し年取って見えた。

直樹 「春になったらまた来よう。お花見がてらさ。」

久美 「うん。そしたらおばあちゃんと暗唱聖句やろう。モタモタしてたら負けちゃいそう。」

直樹 「ああ、やれよ。俺もさっきの覚えようかな。なんかズシンと来るジャン。『神を恐れよ。これがすべてだ』なんてさ。」

久美 「うん、あたしも好きなんだ、あれ。満開の桜の下で、おばあちゃんと聖句を口ずさむなんて、意外な展開だよ、お兄ちゃん。」

直樹 「ああ、何かいいよ、それ。すごいいい。」

N 帰り道、車を運転しながら、僕はさっきのおばあちゃんの言葉を思った。今度来るときまで、おばあちゃんは「足りなかった何か」を見つけることができるだろうか？そして僕はおばあちゃんの年になったとき、「生きててよかった。」と言えるだろうか。それってやっぱり、あの聖句に関係あるのかもしれない。助手席の久美はもう眠っていた。秋の日は短い。いつのまにか追いかけた夕焼けを背に、僕の車は滑るように高速に入って行った。

車のエンジン音、遠ざかって -

< 完 >